

には年六十三と記されている。三代桃庵は法名を濟性院慈源道円居士といい、安永二年七月二十五日に没しており、この記述も『寛政重修諸家譜』の記述と一致する。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室)

呉秀三先生遺稿について

— ことに「杏壇訪古」のこと —

岡 田 靖 雄

呉秀三先生遺稿については、わたしの『呉秀三 その生涯と業績』(思文閣出版・京都、一九八二年)に概説してある。また、わたしが『日本医史学雑誌』第二八巻第四号(一九八二年)にのせた「東京大学医学図書館所蔵呉秀三文庫目録」および「医学文化館に寄託されている呉秀三先生遺品目録」(ともに『呉秀三先生没後五〇年記念会誌』、一九八三年、に再録)にその一部分の題名が記載されている。

先生の遺稿中で、おおきなものは二つある。その一つは『古今図書集成』、『聯斉志異』、『今昔物語』などからかきぬいた東京大学医学図書館所蔵『医聖堂叢書』で、これは『呉氏医聖堂叢書』(一九二三年)の続篇を準備されていたのだろう。もう一つが、今回報告の「杏壇訪古」である。

これは、わが国の太古から明治期にいたる医家人名辞典で、アガタジュンテキからオホハシソウコまでの分は、『神経学雑誌』の第二五卷第三号（一九二五年四月）から第三四卷第四号（一九三二年三月）にわたりのせられているが、先生死去により中断された。掲載分総ページ数は三六〇をこしている。

内容を竹岡友三『医家人名辞書』（竹岡友三・京都府、一九三一年）と比較してみよう。見出し人数はアで竹岡の五八にたいし先生は四四七、イ〔キはのぞく〕は一二八にたいし五七〇、ウは二〇にたいし一九一、エ、エは一六にたいし一一二、オ〔ラはのぞく〕は五二にたいしオホハシソウコまでで二七九と、先生のが圧倒的におおい。といっても、竹岡がとりあげながら先生がとりあげていない医家人名もおおい。アの項についてみると、青地林宗、青木坦平、青木貞三、青柳文蔵、浅井重次郎、海直淡路、阿比古氏雄、阿保朝臣常世、安藤精軒、藍川玄慎、アルマンスである。他方、先生がページをこす記載をしているのに竹岡がとりあげていないのは、秋山玉山、秋山見深、朝川黙翁、熱田祐庵、熱田玄庵、尼子道竹、安西文良であ

る。

先生の記載をみていくと、いくつかの問題点がみえてくる。掲載はいちおうアイウエオ順ではあるが、かなりみだれており、また同一人が二回とりあげられていることもある。先生が『医療正始』はじつは祖父箕作阮甫の訳であるとしているのに、「イトウ ゲンボク」の項に「著ス所医療正始二十一卷アリ」とかいている。

各項目の最後に典拠文献があげられているが、それはそれぞれ別の医家の伝記・墓碑銘のほか、『日本医譜』、『今世医家人名録』、『日本博物年表』、『続日本医譜』、『寛政医家系図』、『海内医林伝』、『大日本人名辞書』、『中外医事新報』などである。『医療正始』に関する記載から察すると、先生は自分の意見はいれずに、典拠とした文献を抄録してまとめたようである。

ところで、「遺稿」というのは、『神経学雑誌』未掲載分である。それは東京大学医学部精神医学教室の物置きに放置されていた。わたしは二〇年ほどまえに整理しかけていたが、今回原田憲一教授の許可をえて、それを全面的に整理しているところである。「遺稿」とかいたが、それらは

先生の直接の原稿ではなくて、「杏壇訪古」をかくための資料で、上記のような典拠文献からの書き抜き、あるいは切り抜きである。ところどころに先生の筆がはいっている。書き抜きは、先生をふくむ数名の筆である。

旧物置き収納品は何回かうごかされているので、うしなわれた分もあることと推察される。この「杏壇訪古」資料は、ほとんどが和紙であるが、オの残りが厚さ六・五センチ、カ行分が一六センチ、サ行分が一六・五センチ、タ行分が四〇センチ、ナ行分が二・五センチ、ハ行分が二六・五センチ、マ行分が二〇・五センチ、ヤ行分が二一センチ、ラ行分が一・五センチ、ワ行分が一四センチある。

掲載分の原稿はのこっていない。これらの資料と掲載分とから推測すると、協力者がある程度そろえたものにもとづいて先生が原稿をつくっていったが、資料があまりにおおいので、最初の段階の整理が充分でなかったようである。

この資料ではナ行分が大部分うしなわれているだろうし、ほかの行の分もどこまでそろっているか。といっても、わが国の医家についてこれだけあつめられた資料はき

わめて貴重なものとおもう。あと一、二年かけてでも、これができるだけ整理していきたい。

(精神科医療史研究会)